

太宰府の文華く公文書館だより 143

太宰府博覧会に行ってみた

ページID: 7241

明治6（1873）年3月20日から5月10日にかけて、太宰府天満宮境内では「太宰府博覧会」が開催されました。東京や京都における先行の博覧会をお手本に、文明開化と地域振興を目的に掲げた太宰府博覧会は、現在、九州国立博物館の設立に至る博物館設置運動の原点として評価されています。博覧会開催の意図は、県内の「新古物品」を集めて展示すること、自然物と人工物、伝来の逸品と新作品の比較批評が可能となり、それを将来的に製品や技術の改良・普及に繋げていく、ということにありました。

福岡の湊町（現中央区港）にあった商家の7代目、加瀬元将かせもともよしかげともよきという人が当時、太宰府博覧会を観覧し感想を残しています。加瀬家は湊町で酒造業や質屋を営みつつ、藩士の給与米を扱い融資も行う役割を担い、福岡の町政にも携わった家です。元将が残した『維新雜誌』は、様々な方面から得た情報を書き留めた記録で、武士や町人と深い関りを持つ彼ならではの資料ですが（『新修福岡市史 資料編 近現代1』）、この中に太宰府博覧会のことが出てきます。

元将は、5月初旬に太宰府博覧会の見物に行きますが、展示物の種類と点数の多さを伝えながらも「目を驚かすほどの品物はなかった」と総評しています。主な展示物を羅列し、「抜群突出の品は見えない」と

言いつつ、「ここに笑うべきは……と綱場町つなばまち（福岡市博多区）の見立細工みたちぎに注目します。綱場町は、菅原道真にゆかりの綱敷天満宮があるところで、明治の終わりがらまで、7月25日の大祭には、周辺の商店が自家の商品を素材にその形状を生かして造形する「つくりもの」を飾っていました。これは「見立細工」と呼ばれ、縁起物や、その時々々に話題となった事象を表現したようです。

彼は皮肉を込めて「天造物を人知で作ることはできないが、人知を挽回するにはこの見立細工のほかはない。」と大仰に発言し、周囲の見物人を大笑いさせています。「人々その知識を研ぎ、文明開化の域に進歩する」という博覧会の主意を踏まえた上での冗談ですが、「これがはたして人知の限界か」と言いたかったのでしょうか。しかし見立細工の出来栄えには純粋に感動した様子で、最終的に「見立細工がまさにこの博覧会の第一等だろう」と風刺的に評しています。

「新しい物が少ない」という点が彼の評価に行き着いた主な原因で、主催者側もこの弱点は認識していました。太宰府博覧会は翌年、翌々年と第3回まで開催されることになり、その過程で、改善に向けた努力がなされていったようです（『太宰府市史 通史編別編』）。